

小説国際プラント・ビジネス戦争（十九）

杉田望

闇に映える虚構のシャトー

春が足早に追っている。九州には桜前線が上陸したという。あと一週間もすれば東京もすっかり春景色になる。井之頭公園の白梅は盛りをすぎ、むしりとられるような痛いたしさで花弁を散らせていた。人の気持ちは移り気なものだ。散りゆく白梅を、人はけっして不憫だとは思わない。そのすぐ後を襲うように、華麗に咲き誇る染井吉野が人びとの目を楽しませてくれるからである。人は春の訪れを染井吉野が開花したことで実感するものである。見事な枝振りの染井吉野が赤味を帯びた蒼を膨らませている。それが水面に美しく映し出されていた。

つき抜ける風にはまだ冬の厳しさがある。今田は慌ててコートのを立て、優しく綾子の肩に手を置いた。その日は日曜だった。春休みを利用して、綾子が今田のもとにやってきてきょうど一週間がたっていた。今日は二人でデイズニードンに出かけることにしていた。

半年以上も見えない間に綾子は目を見張るように成長を遂げていた。・背丈が伸びたこともそうだが、すでに幼女の面影はなかった。最初、綾子を見たとき、今田は、ちよつとした戸惑いを覚えた。項のほつれ毛が妙に生々しく、眩しかった。目元のあたりに母親の面差しが浮かんでいる。美しい少女に成長していた。



そうはいってもまだ子供には違いない。綾子は些細なことにも歓声をあげて、ひょうきんに振るまった。それは短い父親との休日を精一杯楽しもうとする、健康な少女の努力のようにもみえた。旅立つときを忘れてしまったのか、春の陽差しを浴び水鳥が水面に遊んでいる。番いの鴨が岸边に揺れていた。

春休み最後の日曜。デイズニードンは親子連れ、地方から出てきた団体客、

若いカップルで賑わっていた。東京湾から吹き上げる潮風が親客たちを震えあがらせてはいたが、デイズニーの演出にすっかり魅せられた人びとは寒さも忘れ次つぎに展開されるアトラクションに歓声を送っていた。

「まるでアメリカみたい」

綾子がいうようにそこには確かに疑似アメリカがあった。デイズニーランドは幼い綾子の好奇心と期待感を、十分に満足させているようだった。ワールドバザールを抜けると、シンデレラ城が見えてくる。お馴染みのミッキーマウスやドナルドダック、それからブルートの姿もあった。デイズニーのキャラクターたちは惜しみなく歓客たちに愛嬌をふりまいていた。

「今度はスペース・マウンテンに乗りみたい」

と綾子が甘えるようにせがんだ。今田は笑いながら従うことにした。長い行列ができていた。内部はまるで宇宙ステーションのようにつくりだ。宇宙空間を思わせるような薄青白い長い廊下には、星空が見えた。スペース・マウンテンは轟音を上げ滑り出した。悲鳴なのか、歓声なのか。綾子は鋭い声を上げ、今田の手をしっかりと握った。

スペース・マウンテンの次は恐怖の館が見たいと綾子はいった。演出効果が充分に生かされた恐怖の館。それが人工的につくられた舞台装置であることはわかっているというのに大人の今田でさえ、恐怖を感じた。幽霊屋敷の雰囲気をつぶりと味わわせてくれる。綾子は両手で顔を覆いしっかりと目をつぶっていた。今田は二人乗りのオムニムーバーのなかで、笑いながら綾子を抱き締めた。今田も充分過ぎるほど楽しんだ。

もう外はすっかり日が暮れていた。祭の後の寂しさがのこる。明日は綾子を金沢に帰す日だった。また、いつ会えるのか。たぶん、半年後かあるいは一年後かもしれない。そのことを綾子もわかっている。口には出さなかったが、横顔がとても寂しく映し出されていた。

綾子は母親のことに触れることを懸命に避けた。だが、言葉の端から幸子に恋人ができたらしいことがわかった。今田はそのことを意外にも冷静な気持ちで受け止めた。特別な感情は沸かなかった。それも当然の成行きであると思えた。母親に恋人ができたこと、それがどのような意味を持つのか、綾子には充分すぎるほどわかっているようだった。今田はそろそろ法律的にもけじめをつける時期が

きたことを実感した。

残念に思うのは傍にいてこの娘の成長を見届けることができないことだ。この娘にはどんな人生が持っているのか。が、こうしたことは世間にはよくあることでもある。この娘に対する責任、今田はそんなことをふと考えた。今田は何ひとつ力になれない無力な自分を恨めしく思った。

それにしても世間の大人たちはそれをどんなふう考えているのか。今田は無責任な大人の仕打ちにまるで無抵抗な綾子のことを考えると、どうしようもない自責の念に駆られるのを覚えた。大人になった綾子と対座したとき、いかに答えるべきか、と思ったりもした。

仕事、仕事……そして仕事。気がついてみたら妻も娘も自分の傍らから去っていた。四十をすぎて初めて知った淡い恋。それも流れ星よりもっと早い速度で消えていった。いつたい自分は何のために生きてきたのか、これから何を頼りに生きていかなければならないのか。人生がいやに空しく感じられる。綾子との持ち時間はあとわずかに残されているのみだった。明日になれば綾子は今田のもとを離れる。

祭りの後にはたまらない静けさが襲う。人間の関係も今田にはそう思える。出会の感動は、それが激しく大きければ大きいほど、わかればたまらなく寂しいものである。人はその寂しさをまぎらわせるために、新たな出会いを求めてもがくのではないか。それが仕事に埋没することだったり、あるいは新しい恋をすることかもしれない。それにしても元子との恋は短か過ぎた。

ふとみると、人工的につくり上げられたデイズニールランドのシャトーが夜空に浮かび上がっていた。工場群に突如として浮かび上がるシャトーはいかにもちぐはぐである。まだ、あの塔の上から白雪姫が媚びた笑みを浮かべながら観客たちに手を振っているのであろうか。そんなことを考えているとき、バスが大きく揺れ、高速道路に入った。デイズニールランドの灯がどんどん遠のいていった。バスのなかで綾子は父親の膝にうつぶすようにして眠った。可愛い寝息を立てている。今田はそつと柔らかな髪を撫でた。

休暇を終えて、今田は久びさに出社した。どうも様子がおかしい。青木部長の表情も冴えなかった。長谷川がおずおずと今田のところに来てきた。副社長が

お呼びです、とだけいった。青木部長に促され副社長の部屋に入った。きついパイプの香りが漂ってきた。

「特命発注の可能性は消えた」

とだけ大園はいった。

「と、いいますと……」

「つまりパイプラインプロジェクトは三つの工区に分割され、それぞれ公開入札方式でコンストラクターを決定するというアナウンスメントを昨日メヒベトロが発表したらしいのだ」

今田はその話を聞いたとき、ショックを受けた。公開入札に切り替えたということはメヒベトロが重大な政策転換を図った証拠でもある。要するに計画は白紙還元され、パテック社のデリゲーションが来日した際に提出した見積書は無効になったということだ。

「そうすると改めて見積書を提出することになるわけですね」

「その通りだ。わが社としてはパイプライン関連三プロジェクトおよびメタノール計画に参加する方針を決めた。見積り提出期限は二ヶ月後だそうだからさっそく準備に掛かってもらいたい」

大園は平然と喋った。二カ月だと。しかも新規にメタノール計画が加わるとすれば、最低でも四カ月程度は時間を要する。それでは完全な見積りができるかどうか、不安だった。しかし、抗弁できる雰囲気ではない。今田は黙って頷いて部屋を出た。

その日から猛烈な見積り作業が開始された。日管製鉄と毎日、徹夜の打ち合わせが続いた。エネルギー機器部は殺気だっていた。今田は充血した目をこすりながら深夜の残業に耐えた。一カ月がすぎ、パイプライン計画のうちプラットフォームの積算結果がでた。

難関はメタノール計画だった。メタノール計画は関西商事にとっては初めて経験する分野である。最大の問題はパートナーの選定だった。幸い大島化学建設がエンジニアリングを引き受けることになった。触媒技術をどこのものを使うか。大島化学建設はハードの建設では実績を持っているものの、ソフトに弱かった。急遽、西ドイツのベルグ社と提携することになった。

この二週間ほどの間に今田は三度ばかりベルグ社の本社のあるフランクフ

ルトまで飛んだ。相手がメキシコとあって、ベルーグ社は最初、提携に難色を示したが途中から態度を変え、交渉は順調に進んだ。そうこうしているあいだに見積り期限の六月三十日が迫っていた。

季節はすでに初夏を迎えようとしていた。陰惨な梅雨の季節が始まっていた。今田たちには季節の変化すら気にとめるゆとりがなかった。日管製鉄も見積り作業によく協力してくれた。今田は十キロほど体重が減っていた。来月から高校野球が始まる。政府は冷房用のエネルギー需要が夏場にかけて増えるので、引き続きエネルギーの節約が必要だとして、省エネルギーキャンペーンを展開していた。が、国民はそれほど深刻に事態を受け止めてはいなかった。

「佐藤忠商事がメタノール計画だけでなく、パイプライン計画にも見積書を提出する気配です。どうもメヒペトロと特別な関係をつくっているだけでなく、米国の石油メジャー、エプソンズと組んで、入札に臨む方針のようです」

見積書を携えてメキシコに立とうとした、その日の午前の定例打ち合わせ会議で青木部長がそう報告した。西ドイツとフランスがこの計画に参加することは専門誌の報道などで知ってはいたが、やはり最大の強敵は佐藤忠商事であった。しかもメジャーと組んで入札に臨むということは、容易ならざる事態である。関西商事の立ち遅れは決定的である。

「エプソンズを巻き込んで応札するというのか」

大園は怒鳴るように聞き返した。明らかにシヨックを受けたようだった。エプソンズが参加するとは、メキシコとの関係からいって想像もできないことだった。大園はふうつとため息をもらした。

メキシコでいったい何か起こっているというのか。考えてみても思い当たらない。むしろメキシコの政治情勢は好転していた。五月に実施されたメキシコの大統領選挙は結局、選挙に不正があったとしてやり直しになったが、暫定的に前蔵相のアルフォンマが大統領に就任したことで、混乱を極めていた政局も収束の方向に向かいつつあった。テクノクラートの頂点に立つアルフォンマを臨時大統領に選んだことが幸いしたようだった。その意味でこれは順当な選択ではなかったか、と今田には思えた。

アルフォンマは穏健でニュートラルな政策を打ち出していた。まず、天然ガスの存在を国際的に公表する一方、かたくなな孤立化政策を改め、対外債務支払い

に關しても、交渉によつて選別的に支払いを再開していた。アルフォンマの対外政策は内外から概ね好感をもつて迎えられていた。これは当然のことであつたが、カルロスの影響力は急速に衰えていた。しかし、アルフォンマの政権基盤はやはり民族派を背景としていた。

だから対米關係に關していえば、相変わらず強硬な姿勢を崩していなかつた。反米主義が国民的合意の最後の拠り所となつてゐるからには、それは仕方のないことであつた。そうした文脈からいつても、メジャーがメキシコの天然ガス開発計画に乗り出すことはまず考えられないことだつた。したがつて対米關係をどう調整するかは、アルフォンマ政権にとつては最大の懸案とみられていた。

メジャーがメキシコに乗り出したということであれば、米墨間に關係改善に向けて何かが起こつたとみななければならない。事態の展開は急激である。考えられることはエネルギー関連で米墨が手を握る可能性だつた。會議ではこれといった意見も出なかつたし、新しい情報も報告されなかつた。大園は腕組みをしてじつと考え込んでいた。

その日の夕刻までに、河上専務の調べによつて、佐藤忠商事がどのような動きをしているか、その概要が判明した。再びメキシコ・プロジェクト關係者會議が召集された。出席者全員が興奮気味だつた。河上専務の報告を全員が固唾をのんで待つていた。やがて河上が姿をみせた。

「メキシコ向けに国際金融クラブをつくることに成功した、それが決め手になつてゐるようです。資金の調達額は二十億ドル、クラブの中心メンバーはユダヤ金融資本とアラブドラーのようです。これを佐藤忠商事が系列の第三銀行と組んで債務保証する、というのが基本的なスキームです」

午後六時から始まつたメキシコ・プロジェクト會議の冒頭で河上専務がそう報告した。會議には大園副社長のほかに鉄鋼本部長の玉垣常務、六月の定例株主總會で専務に昇格した業務本部長の新井が出席していた。どうしたわけかその日、桑原取締役の姿はみえなかつた。

桑原といえば、今度の株主總會で常務昇格が噂されてゐたのだが結局は実現しなかつた。功を焦つたのが原因、というのがもつぱらの噂だつた。業務企画本部長の後藤部長の顔もみえた。ふてぶてしい面構えは相変わらずである。視線が合うと、今田にわずかに頷いてみせた。

「で、使途は応札プロジェクトに限定しているのですか」

「いや、そうではない。使途を限定しないところに今回のシンジケーションの特色があるようです。アイデアとしてはなかなかのものですねあ」

大園の質問に河上専務はそう答えて、言葉を続けた。

「つまり二十億ドルの資金は自由に使って頂いて結構です、というのがこのクレジットの特徴でありまして、たぶんこの資金はプロジェクトで必要とされる現地費用に投入されることになるのではないかと思われれます。また、借り手の自由裁量の部分が大きいことも特徴のひとつです」

コンソーシアムの組成に成功したのはちょうど一ヶ月前だったという。微妙な時期だった。アルフォンマは一年の約束で臨時大統領に就任していた。だから一年後には再び大統領の椅子を巡って、激しい選挙戦が戦われることになる。この微妙な時期に佐藤忠商事が二十億ドルのシンジケーションを組んだこと、それは今回の入札では決定的な意味を持つ。つまりその一部が政治資金としてマリオネス派に流れると考えるのが自然だ。

しかもエプソンをコンソーシアムに参加させたことは、対米関係の調整をすでに終えていることを意味した。佐藤忠商事の戦略は見事に成功したと見なければならぬ。たぶんこのアイデアを出したのは笠原副社長ではないか。笠原のあの冷酷そうな表情が今田の脳裏をよぎった。

それにしても不鮮明なのはレピカの立場である。レピカが日本にきた際、佐藤忠商事に接近していたことは、今田も知っていた。今度の場合、レピカはどう動くか。佐藤忠商事が何らかのコミットをレピカにしていることは考えられないことではない。佐藤忠商事はあらゆる手を使って、プロジェクトを獲得する気迫が感じられる。

これに対して関西商事は例の山田社長と大園副社長との確執が災いして、出おかれてしまった。日墨協定で約束された援助資金以外にファイナンス問題は検討していなかった。

うかつといえ、これほどうかつな話はない。出席者全員が頭を抱え込んだ。議論は空転した。会議ではこれといった対応策は協議されなかった。いつもは饒舌な新井専務はこの日に限って寡黙だった。計画推進に反対を唱えた経過からいってもそれは当然だった。

いずれにしても見積り提出まで、わずか一週間の時間しか残されていなかった。実際のところ手の打ちようがない。結局は自然体でいくしかないのではないかと、という平凡な結論に終わった。会議は早ばやと切り上げられた。だが、大園副社長はしきりに何事か策を練っているような素振りだった。

「今田君、後で私の部屋まで来てくれないか」

会議が終わった後で、大園副社長がそういった。今田は何か悪い予感がした。冷房が切れているため、副社長室はむっとするような熱気を帯びていた。今田は大園が考えていることがわかるような気がした。

「ここに無記名の小切手がある。これをロスアンゼルスで現金に替え、メキシコまで連んでもらいたい。理由はいわなくともわかると思うが、この小切手で必要だけ現金化してかまわない。それは君の判断に任せる」

やはりそうだった。悪い予感的中した。厭な役廻りである。渡された小切手の振出人は、シイ・テイ・トレード・コーポとあるが、もちろん今田には聞き覚えのない会社である。本社はロス。たぶん実体のないペーパーカンパニーであろうと思った。小切手を受け取る今田の手元がわずかに震えた。この幽霊会社はグレーな資金を調達するために、大園がつくったダミーであろうが、今田は余計な詮索は止めることにした。

金で相手の意志を自由にする、これは汚い仕事には違いないが、商社に二十年も勤めていれば、こうした類ぐいの仕事はままあることである。それに今田にとってもこの種の仕事は初めての経験ではない。正直いつてかつては誇りに感じたことさえあった。だが、なぜか今回に限って気乗りのしない仕事だった。重く沈澱したものが心の奥底に残るのを覚えた。

翌日、今田はロスアンゼルスに立った。その日のうちに今田は指定された銀行に出向いた。聞いたこともない小さな銀行だった。すでに連絡があったとみえて、手続きは簡単に済み、身元の確認さえ行なわれなかった。まず五十万ドルを米ドルで現金化した。百ドル紙幣で大型のアタッシュケースに一杯になった。巨額な現金を手にしただけにさすがに緊張した。ロスからは陸路でメキシコに入れというのが、大園副社長の指示だった。

その日はロスで一泊した。アタッシュケースが気になって仕方がない。その夜は一睡もできなかった。早朝、レンタカーを借りてメキシコ国境に向かった。八



イウエーが果てしなく続いていった。メキシコ国境までアリゾナ経由で十五時間かかるか聞いた。車はまる半日荒涼とした大平原をひたすら走った。対向車はほとんどない。真つ赤な夕日が大地に沈みかけていた。

夕日に染め上げられた大地が霞んできた。逆光のなかにコアトリクエの女神像が浮かび上がってきた。幻のようでもある。女神像が微笑みかけた。なんともたまらない魅力に満ちた微笑みだった。夕日をこれほど美しく感じたことはない。それよりも女神像のなんと魅惑的なことが。

今田は真つ赤な夕日のなかに次第に引き込まれていった。無限の光のなかに吸い込まれていくような気がした。まるで自分が光と合体するかのような心地良い気分だった。たぶんそれは奈落の底に突き落とされる道に違いないとは思ったが、コアトリクエの魅力には抗し難かった。

「そうきちさん、そっちにいつてはだめ、こちらです」

だれかが今田に向かって呼びかけた。母のような気もしたが、違うようである。もう一度呼んだ。今度は明瞭だった。元子の声だった。姿は見えない。闇の向こうから聞こえたように思えた。今田は思いきりブレーキを踏んだ。車がきしみ音を立て停車した。

「元子か……」

今田はひとり呟いた。今田は睡魔に襲われたようだった。両手で頬を叩いた。軀に悪寒が走った。首筋にじつとりと脂汗が流れていた。今田はもういちど助手席に置いてあるアタッシュケースを確かめた。なぜか安堵した。とつぷりと日が暮れていた。大地は暗闇に包まれていた。車のライトから放たれる光だけが人間の存在を確かめているようだった。

黒ぐるとした大地の遠く向こうに米墨国境のノガレスの街の灯が近づいてきた。国境の街、ノガレスはなだらかな丘陵地帯にあった。ゲートの両側に街の灯が広がっていた。同じ地名でもメキシコ側の街の風景は何と貧しいことか。星条旗のもとにあるノガレスは水をふんだんに使い、家々の庭先には蒼い芝生がいきづいている。

が、メキシコの国境の街は砂ぼこりのなかに、まるで掘建小屋のような家々がびっしりとひしめきあっていた。この対照的な風景に今田は驚いた。貧富の差が如実だった。これでよくまあ、アメリカと本気で喧嘩をする気になったものだ、

とあきれながらも改めて感心した。

アメリカ側でレンタカーを捨て、歩いて国境を越えることにした。人は少なかつた。イミグレーションを通過するときはさすがに緊張した。アタツシユケースの中身が中身である。こわばる手でアタツシユケースをしっかりと握った。サーチライトがときおり頭上をかすめて光った。

「ビジネス旅券か」

陸路でメキシコ入りするビジネスマンは少ないようである。イミグレーションの役人は少し怪訝けげんそうな表情を浮かべたが、勢いよくパスポートにスタンプを押し、大げさな身振りで出口の方向を指し示した。疑う素振りはなかった。今田はほっと胸を撫で下ろした。

太陽が消えたメキシコの街は冷え冷えとしていた。メキシコ側の街まで歩いて五分ほどの距離だという。入国管理事務所のゲートには数人の男が壁に寄り掛かるようにして寝そべっていた。

今田が通りかかると、やおら立ち上がった。鋭い視線を今田に走らせた。そのうちの一人がスペイン語でがなりたててきた。今田には意味不明である。背筋に戦慄が走った。

「今田さん……！」

背後から今田を呼ぶ声が聞こえた。明瞭な日本語だった。振り向いて、驚きであつと声を上げそうになった。そこに小川の姿があつた。小川はにこやかに近づいてきた。先ほどの男は、意外な場面の展開に呆気にとられて引き下がった。

今田は無言で頷いた。小川は車があるからといって、駐車場の方に先にたつて歩き出した。アタツシユケースを受け取ると、小川は無造作に後部座席にほうり込んだ。車は中型の日本車だった。勢いよくエンジン音を立て、南に向って滑り出した。

「旅はいかがでした……？」

「いや、疲れました」

「今日はノガレスに泊まりましょう」

その夜、今田は死んだように眠った。強い朝日がカーテンの隙間から射し込んでいた。気がついてみると、すでに八時だった。今田は身支度を整え、ホテルのレストランに降りた。窓際で新聞を読む小川の姿があつた。窓越しにみえるメキ

シコの空は抜けるように晴れ上がっていた。今日も暑い一日になりそうだ。今田は声をかけ小川の前の席に腰を下ろした。

「どうでした、よく眠れましたか」

「おかげさまで、ぐっすり休ませて頂きました」

小川はチャーター機を用意しているといった。出発は十時。それでメキシコ・シティまで飛ぶことになった。なぜ、小川が国境の街まで出迎えに来ているのか、今田も聞かなかったし、小川も説明をしなかった。二人の間に奇妙な沈黙が続いた。小川は闇の取り引き、この収賄工作に荷担することに少なからず抵抗を覚えている様子だった。どうみても小川には似つかわしい仕事ではない。今田はこういう形で小川と会ったことに妙なこだわりを感じた。

小川は今田の存在を無視したような態度で新聞を読み続けた。小川はこれから始まる取り引きに関して、話題にするふうではなかった。だれにどういう形で現金を渡すのか、結局、小川の口から聞けなかった。ともかく小川がいったことは、十時のチャーター機でメキシコ・シティまで飛ぶこと、それだけである。小川もまた、この件では完全なメッセンジャーにすぎないということであるうか。かえってそれが気分をほぐしてくれるようにも思えた。

「さあ、そろそろ出ましようか」

小川がそういつて立ち上がった。出発の時間だった。

チャーター機は途中、激しく揺れた。今田は幾度、嘔吐をもよおしたことが。それは単に飛行機の揺れのせいだけではなさそうだ。これから始まるダーティな取り引きを軀が拒絶しているようでもあった。見覚えのあるメキシコ・シティの町並みが視界に広がってきた。小型機は横風に翻弄されながら、幾度かパウツドを繰り返しようやく地上に止まった。午後の太陽はアスファルトを焦がすように照りつけていた。熱気がむつと足元から沸き上がってきた。

「エリアミーノがクエルナバカで待っています」

とだけ小川がいった。今田は無言で頷いた。かなりの強行軍となる。再び小川の運転するセダンでクエルナバカに向かうことになった。午後の太陽がメキシコの大地を染め上げている。今田は疲れ切った軀を座席に沈めて、無感動に車窓に走る風景をみやっていた。疲労でほとんど思考力を失っている状態だった。車のなかでも小川は相変わらず寡黙だった。

案内されたところは例のコロニア風のホテルの一室だった。薄明りがついているだけで、なんとも息苦しい部屋だった。当然、レピカが顔を見せるものだと思っていた。が、姿を見せたのはエリアミーノだけだった。エリアミーノは今田が渡したアタッシュケースを開き、肥満した軀を苦しそうに折り曲げながらドル紙幣を数えた。いかにも慣れた手付きである。その横で小川が醒めた目つきでみている。儀式はほとんど無言のうちに進行した。今田は流れでる汗をしきりに拭き払った。

「確かに受け取りました」

そういつてエリアミーノがボタンとケースの蓋を閉めた。それがとつともない大きな音に聞こえた。エリアミーノは、葉巻をとり出して火をつけ深ぶかと吸い込んだ。

「それでは数字を頂きたい」

今田が短くいった。エリアミーノは大きく頷くと、ケースのなかから数枚の書類を引き出し、小川の前に置いた。びっしりと数字が書き込まれてあった。メキシコ側のオーナーズ・コンサルタントが作成した入札予定価格のようであった。

「頂けますか……？」

「いや、それはまずい」

「それでは写させてもらえますね」

エリアミーノがわずかに頷いた。今田は急いで手帳に書き込んだ。メモを取る手元が震え、書き取るのに手間取った。冷たく見下ろす小川の視線を背中に感じた。

取り引きはほんの三十分ほどで済んだのだが、今田にはとつともなく長い時間のように思えた。一刻も早くそこから逃げ出したかった。小川も同じ気持ちのようで、せきたてるようにして部屋を出た。入札予定価格を書き込んだ手帳を、胸をさすってもういちど確かめた。今田はもはや立っていることすらおぼつかないほど、酷い疲れを覚えた。

天井にぼうつと、裸電球がついていた。そこは病院だった。きつい消毒液の臭いが漂っている。どうやら助かったらしい。身動きしようとする、全身に痛みが走った。今田は鋭いうめき声を上げた。

「今田さん、気がつかれましたね」  
のぞき込んで、そういつた顔は秋野  
だった。

あれは明らかに故意だった。鮮明に  
記憶が蘇ってきた。ホテルを出て三十  
分ほどもたっていたか。小川がハンド  
ルを握る車はメキシコ・シティに向か  
って、ちょうど急勾配の上り坂に差しかかったときだった。突如、後方から大型  
トラックが猛スピードで迫ってきた。小川は道を譲るつもりで、ハンドルを左に  
切った。大型トラックは執拗しつようだった。

ガアアンと大型トラックのバンパーが食い込んできた。一度は避けることがで  
きた。小川は思いきりアクセルを踏んだが、二度目は間に合わなかった。もの凄  
い衝撃が襲った。二人を乗せた車はガードレールを越え転落した。弾みで今田は  
フロントガラスを突き破り、車の外に放り出された。後ろの方で爆発音が聞こえ  
た。めらめらと車が炎上していた。今田が覚えているのはそこまでだった。

「小川さんは……？」  
「亡くなられました」

なぜ、命を狙われることになったのか。たぶん、メキシコの政争と無関係では  
ないように思えた。今田の脳裏に成田で初めて会ったときの小川のすがすがしい  
表情が浮かんだ。ジェーナとかいった小川の妻のことも思い出された。今田は無  
性に腹が立ってきた。ふと、手帳のことが心配になった。

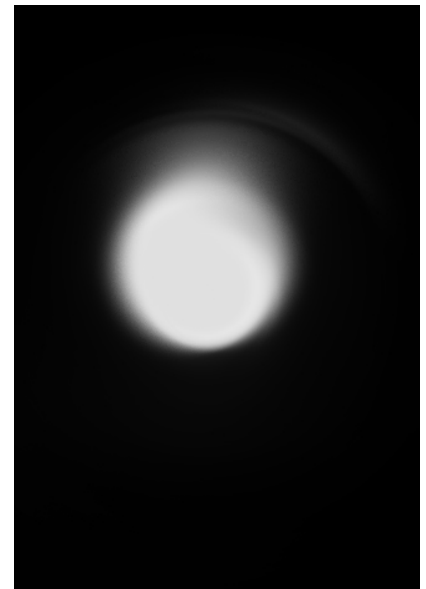
「警察から預かったのはこれで全部です」

秋野がこまごまとしたものが入ったビニール袋を今田の枕元に持ってきた。身  
分証明書、クレジットカード、カード、旅行小切手、小銭入れ、財布などがあつた。が、  
肝心の手帳がない。もういちど、捜したがない。手帳は消えていた。これで二人  
を殺害にかかった目的は明瞭だった。それならば、あの数字を思い出せばよい。  
今田は満身の力を振り絞るようにして、記憶の糸をたどった。

「秋野君、メモを用意してくれ」

「無理としては駄目です」

「今でないと……思い出せなくなる」



プラットフォームのうちガス分離装置三億四千五百万ドル、プラットフォーム本体二億二百三十万ドル、圧力調整装置一億三千二百万ドル、ガス回収装置一億二十万ドル。今田の口からスベックごとの細かい数字が吐き出された。ほぼ完全に数字は修復されたようである。秋野は今田のもの凄い記憶力に圧倒されながら、必死でメモ帳にペンを走らせていた。

「それをすぐ大園副社長にテレックスしてくれないか……」  
「そういい終えると、今田の意識は再び膠朧としてきた。」

( つづく )

## 小説国際プラント・ビジネス戦争（完）

杉田望

### 覇者不在の耐久レース

夏も終わり、季節は晩秋を迎えようとしていた。太陽の光はすっかり和らいでいる。あれからちょうど三カ月が過ぎていた。今田は時どきあの事故のことを思い出すことがある。考えてみれば、ぞつとするような事件だった。それにしてもよく助かったものだ。まさに奇跡だった。事件の翌日、ベッドのなかで今田はメキシコ警察の尋問を受けた。結局事件は単なる交通事故として処理された。もちろん故意に追突したトラックのことは確認されずに終わった。

事件から一週間して、今田はタンカに乗せられて帰国した。右足の複雑骨折で全治にまる二ヶ月を要した。傷が時どき疼いた。それにしてもゆっくりと静養している時間はなかった。入札書類を提出したあとメテクニカル・ネゴなど細部の交渉が続いていた。

その日はメキシコ天然ガス計画の入札結果が発表される日だった。今田には特別な感慨はなかった。骨折した右足を<sup>いび</sup>労るようにして、自分の席に着いた。午後から機械本部の会議室で、入札発表に出席している中嶋部長からの報告を待つことになっていた。すでに十一時。エネルギー機器部全体がざわめいていた。総額三十億ドルに上る商談結果が判明するのだ、無理もなかった。

だが、今田には白けた気分はどうしようもなかった。公開入札とはいっても土台茶番ではないか。賄賂で買収して、応札予定価格はすでにわかっていて、そのために一人の男が死んだ。痛ましい犠牲だった。今田は小川との寡黙な旅のことを思い出していた。

午後三時、現地メキシコの中嶋部長



から電話が入った。パイプライン・プロジェクトのうちプラットフォームとガス分離装置が一番札だった。パイプライン工事の西部工区はなんと佐藤忠商事が一番札をとった。これには驚いた。次いで問題のメタノール・プラントは西ドイツとフランスのコンソーシアムが一番札を占め、佐藤忠商事とニッケ社の連合は三番札に終わった。これも意外だった。

エリアミーノが本当のことをいったのは結局、プラットフォームの予定価格のみだったことになる。パテック社も強気であったということだ。してやられたという感じもなかった。五十万ドルにしては、いかにも高い買物のように今田には思えた。それでも関西商事が一番札を占めたアイテムは総額で八億六千五百万ドル近い金額である。

大園副社長は腕を組み、目をつぶって入札結果に聞き入っていた。表情にはほとんど変化は見られなかった。だれが考えても結果はまずまずだった。が、五十万ドルもの買収資金をつぎ込んでいる。それを思えば敗北だった。しかも入札結果を受けて始まるコマースヤル・ネゴがどういった展開をみせるか、まだすべてが決着しているわけではない。最終的には発注内示書を受けとるまで、安心できないのがこの世界である。

入札結果が蛍光掲示板の上に書き出されていた。最後にメタノール火力発電所の応札結果が書き込まれた。これは最初に放棄を決めたアイテムであったが、佐藤忠商事が末端の札を引いたことに、全員が歓声を上げた。今田はその光景をにががしい思いで見守っていた。大園がすつつと席をたった。だが、会議室にはどよれきが残っていた。

功労者は今田だと、だれかがいった。祝杯を挙げようという仲間の誘いには乗れなかった。今田は早ばやと引き上げ、エレベーターに乗った。今日は一人でたたかに呑み酔いたい気分だった。

「よう、今田君、元気になったのかね」

エレベーターのなかに後藤の姿があった。その日の後藤は背筋をしゃっきりと伸ばし、社内ではめつたにみせたことのない生き生きとした姿であった。夕方の遅いエレベーターのなかは二人だけだった。今田はなぜだか理由はわからないが、懐かしい気分になった。

「お陰様でこの通り元気になりました」



「それはよかった。今日は急ぐのかい……僕も明日で定年なものでね」

「そうですね、長い間ご苦労様でした。で、どちらの方へ……？」

「この通りの依怙地な性格なもんで、私なんぞだれも拾ってくれるところはありはしませんわ。これも人生かな……だよ」

後藤はそういうと、声を上げて笑った。けっして拗ねた素振りではない。淡々とした話し方だった。エレベーターを降り、二人は自然に肩を並べて歩きだした。誘ったわけでもないし、誘われたわけでもない。だが、後藤の背中に人恋しさがにじみ出ているように見えた。後藤が手を上げてタクシーを拾った。今田は黙って後藤の後に続いた。

「僕の行きつけの酒場が本郷にあるんだ」

座席のシートに軀を預けながらいった。本郷三丁目の地下鉄のすぐそばにその酒場はあった。しもたや風の店だった。七十に近い老人がこの酒場の主人だった。元気がよい。いらっしやい、と威勢よく声をかけた。つくりはカウンターだけで実に狭かった。七、八人も座れば満杯になるうか。壁はすすで薄汚れ、カウンターも手垢にまみれ、衛生に関してはまるで無頓着のようだった。お世辞にもきれいだとはいえない。客の姿はなかった。

「学生のころからの馴染みなんだ」

後藤は呟くようにいった。そつだとすれば三十年以上も通い続けたことになる。どうやら後藤の席は決まっているようだ。奥まった壁を背にして腰を降ろした。今田は並んで座った。おやじが、すかさず徳利と杯をカウンターの上に置いた。肴はこつてりした牛の臓物の煮込みだった。咽元を熱い酒が通り過ぎ、生き返った心地がした。

「手酌でやるうや」

そついうと、後藤は立て続けに杯をあおった。

「どうだい、景気の方は……」

おやじがくさやを焼きながらいった。あの独特の臭いが漂ってきた。

「明日で会社勤めもおしまいさ」

「そりやめでたいじゃないか。今日は俺の奢りだ、遠慮なくやってくれ」

「そうさな、おやじさん。この店には一軒家が建つほど金を使ったからなあ」

「馬鹿いっちゃいけないよ。それにしてもこの通りの貧乏だ」

「それに違いない」

三人は声を上げて笑った。後藤は酔うほどに饒舌となった。後藤は癌を患っていた細君を昨年亡くしたようだ。子供のいないことは、いつか聞いた覚えがあった。天涯孤独になって、かえってさばさばした気分だ、と後藤は豪快に笑ってみせた。それは強がりなのか、本気でそう思っているのか。だが、肩のあたりに漂う寂しさは隠せないようだ。

「俺の持ち時間はあと十年だと考えている。第一、ふしだらな生活をしているからね。六十までの五年間は、好きなように人生を楽しむさ。残りの五年は死の準備のために生きるつもりだ」

老醜を晒したくない、ともいった。人の命をそんな簡単にコントロールできるものか、と今田は反論した。いや、人間だからこそ、それが可能なんだ、と強い口調で後藤はいった。享楽を受け入れたあとで、自殺でもするつもりなのか。暗くじめついた話に今田は陰鬱な気分になった。

「自殺では俺の美意識が許さない。それにはた迷惑だ」

そうではない、と後藤はいった。生命を支えるエネルギーは定量である。だからそのエネルギーを最終目標に向って、どのように燃烧させるかが問題となる。最後まで自分を正面から死と対置させることで、自分の肉体から魂が抜け出す瞬間まで、冷静に自分を見つめることができれば幸いだ。それを六十からの五年間で準備したい、と後藤はいった。

「後藤さんはまだ若いではありませんか。そんなことを考えなくとも……」  
趣味に生きるとか、再びメキシコの歴史を勉強しなおすとか、いろいろ前向きな生き方があるのではないか、ありふれたいい方だとは思ったが、そんなことを今田はいった。

どうやら後藤は今田の逆らいに勢いがついたようである。話の脈絡は例によってめちやめちやである。気が少しおかしくなっているのではないか、とさえ今田には思えた。要するに後藤は話の内容はいつでもよいらしい。しゃべることで寂しさをまぎらわしているのだろうか。

後藤は世間でいうところの一流国立大学を出て関西商事に入り、まぎれもなくひとつの時代を築き上げた男である。メキシコに限らず、中南米の商売では後藤は伝説的な人物だった。必死で走り続け、いつのまにかこの男の情熱は燃焼しき

ってしまったらしい。気がついたときには、敗残者のようにうずくまっていた。異物はじゃまだった。

明日は定年退職する。後藤は繰り返していった。職場の人間関係にあればど冷淡でいた後藤にしては口からでる言葉は、意外にもウエットだった。三十年以上も勤め上げた職場を去るのだ、感傷的な気分になるのも無理はない。労いの言葉いらいとてなく職場をさることになるのか。家族がいれば、ご苦労さんと労いたってくれるものもあるのに、その言葉すらも期待できない後藤が哀れだった。

後藤はそのことを自覚しているようだった。だからかなり真剣に敗残者の最後はどうあるべきかを、考えているのだろう。そして、現世ではなく、死後に期待をかけて残された人生を生きていこうとしているかに見えた。そんな後藤の姿に今田は自分の未来像を見る思いがした。

いつのまにか、後藤は寡黙になっていた。眠ってはいない。口元から聞き覚えのあるメロデイがかすかに流れた。途切れ途切れに聞こえた。それはかつて学生運動のなかで聞いたワルシヤワ労働歌の一節であるように思えた。青春の残影を追っているような表情を後藤はしていた。

昨夜は久しぶりで深酒をした。まだ、酔いでしびれているような感覚だった。骨折した後の右足が鈍く痛んだ。その日も忙しい一日となった。秋の日は短い。気がついたときはすでに夕刻だった。その日の午前、後藤が退職の挨拶に現れた。深ぶかとお辞儀をして去っていった。今田は漠然と後藤のことを考えていた。そのとき、机上の電話が鳴った。

「小川君の友人だった山元と申します」

成田で会ったあの男に違いない。聞き覚えのない名前だったが、すぐに思い出した。山元はこれからすぐに会いたい、といった。今田は約束の場所を決めると、電話を切った。

今田は少し早めに約束の場所についた。今田はあつと、息を呑んだ。山元のすぐ後ろに前原知子の顔があった。知子が現れたことは予期せぬことだった。山元は無造作に名刺を出し、席に腰を降ろした。知子が並んで座った。ひと呼吸おいて、山元が切り出した。

「小川の最後がどうだったのか、それが知りたいのです」

大型トラックがしつこく追いかけて追突したこと、そこが急勾配の坂道だったためにハンドルが充分に切れず、ガードレールを突き抜け転落したことなど、今田は事故の模様をかいつまんで話した。山元はしばらく黙って話を聞いていた。

「そうすると、事故ではなく、それは明らかに殺人事件というべきですね。あの夜、あなたと小川は何のためにクエルナバカにいったのか。そして二人がなぜ、襲われることになったのか、話して頂けませんか」

知子も真剣な表情で今田の答えを待っていた。今田は答えようがなかった。そのことを話せば、当然、あの夜のエリアミーノのとり引きのことをいわなければならぬ。だが、そのことは他人に話せるような内容ではなかった。今田は渋い表情をつくって黙りこくった。

「企業秘密ということですか。それならば、私の方から申し上げましょうか」  
これは想像だが、と前置きして山元が話し始めた。

メキシコでは民族派と親米派が深刻な政争を繰り広げていた。アメリカがこの政争に直接介入したことが、この両者の対立をさらに増幅させた。民族派を代表するのがカルロスで、親米派を代表するのがマリオネスだったことなど、山元は淡々とした口調で話し始めた。山元の分析力に今田は正直いつて驚いた。山元の話はさらに続いた。

民族派が押すアンジエトロ政権の腐敗はひどいものだった。学生や労働者が政権打倒に立ち上がった。CIAが介入して反政府運動を煽り立てた。民族派はおされ気味だった。アンジエトロ政権は揺らいだ。そこで思いついたのがデフォルトを実施することだった。

実際のところメキシコには対外債務の支払いのゆとりがなかったことも事実だったが、破れかぶれの、米国を正面の敵に据える戦略が成功した。国論は反米一色で固まった。だが、この結果、メキシコは国際的に孤立した。幸いというべきか、そこでサウジの事件が発生した。

「サウジ事件は偶発だったのか、綿密な計画の上に実行されたのか。僕はこの事件にはメジャーが絡んでいた疑いを持っている。それはあくとして、ともかくサウジのワール油田が消滅したことで、世界のエネルギー情勢は一転した。注意深くみれば、これで得をしたのがだれなのか、それが米系メジャーであったことは明白な事実です」

サウジ事件にメジャーが介在していた。有り得ない話ではない。事件発生と前後して原油価格が異常に高騰したこと、その後のイラン過激派に対する追及が曖昧になり、結局、あれだけ大きな事件であったにもかかわらず、背後関係が未だに解明されていないことなど、事件は謎に包まれたままであった。

「どうやら今田たちとは関係のない世界がもうひとつあることは確かなようだ。不気味な世界だ。今田は空恐ろしく感じた。メキシコとイラン過激派との関係、それにアメリカの情報機関はどう動いたか。カール・ルビンスの顔が浮かんだ。「それで……」

と今田が言葉を促した。声は乾いていた。

「にわかにはメキシコの天然ガスが脚光を浴びるようになった。だが、ここでアメリカは反撃に転じた。開発の主導権を民族派から奪い取るため、民族派の切り崩しにかかった。最初に転んだのがカルロスが最も信頼していたレピカだった。レピカは佐藤忠商事の笠原副社長と結び、密かにエクソンスと連絡をとる一方、資金調達のため、国際シンジケート・シヨンの組成に取り掛かった。これはユダヤ資本とアラブ資本の一部が協力したため、うまくいった。この作戦にはCIAが全面的に協力した、と私は見ています」

なるほど、山元の話には思いあたるところがある。山元はかまわず一方的に話を続けていた。知子が山元の横顔をじいっと見つめている。それは恋をした女の眼差しに見えた。

「そこで民族派、つまりカルロスは日本の出方に賭けた。だが、日本はまるで国際情勢に音痴だった。途中でアメリカの圧力が入った。日本はアメリカの恫喝にびびりはしたが、エネルギーの確保が国是だった。日本はあれやこれや条件を付けた上で、五十億ドルの借金を提供することを約束したのではなかったか」

「ディテールはともかく、山元の話は正確だった。不思議に思うのは山元がなぜそんなことを知っているかだった。小川との関係か、それとも日東経済研究所というところはそうした情報を常に集めているところなのか。しかし、今田は山元の話の黙って聞く以外になかった。

「だが、マリオネス派が国際シンジケート・シヨンの組成に成功したことで、日本からとり入れた借款も相対化された。こうなればエンドレスのゲームになる。決め手が必要だった。簡単にいえば、カルロスは民族派を再結果するためにカネが必

要だった。カルロスの影響力はすでになかったが、カネを用意することでかろうじて権威を保とうとしたのではなかったかと、私は思う」

今田は推理小説の絵解きを聞くような気分で、山元の話に聞き入っていた。

「そこでカルロスは小川を通じて、関西商事に入札情報を提供する見返りに賄賂を要求したのではなかったか。たぶん小川の性格からして、相当に悩んだに違いない。彼は理想に生きる男でしたからね……さあ、今田さん今度はあなたが真実を話す番だと思いますが、いかがでしょう」

そういえば、あのとときの小川は深く沈んでいた。ほとんど無言で続けた小川の旅のことを今田は思い出していた。小川がみせたエリアミーノへの冷たい視線、たぶんあれはなにも知らず収賄劇に引きずり込まれた、一サラリーマンにすぎない今田に対する同情だったのかもしれない。

あの薄暗いホテルの一室でのエリアミーノとのやりとりを思い出した。それに小川のあの沈んだ視線が今田の記憶に鮮明に残っている。今田は意を決したように話し始めていた。

「やはり僕の想像はあたっていたのですね」

山元が低く呟くようにいった。

「それにしてもなぜ、僕らは命まで狙われなければならなかったのか」

「これも想像で申しわけないが、あなたたちはエリアミーノに騙されたのではないかと思う。つまりエリアミーノはあのカネを詐取するために、あなたがたがこの世に存在することかじやまだったのです。あとでカルロスにはカネは受け取らなかった、といいわげができますからね」

「しかし、僕はあるとき彼から入札予定価格をみせてもらった……！」

「そうだとしたらそれは出鱈目な数字ではなかったでしょうか。あときエリアミーノはすでに工業開発省には在職していなかった。それに彼は入札予定価格を知れる立場にはいなかったはずだ。この件でアルフォンマから全権を委託されていたのが、ペルドスであったことを知っていましたか」

「うちは、プラットフォームでは一番札を引いているのですよ」

「まだ、あなたはこの虚構のゲームを信じようとしているのですか。それはたぶん偶然の結果ではなかったのか、一番札を引いたのだったらそれ以外には考えられない、僕はそう思う」

関西商事がとれたはずのパイプラインは、一部が佐藤忠商事に流れた。これもまた、不思議なことだったが、佐藤忠商事が本命としていたメタノール・プラントは西ドイツがとった。考えてみれば、確かに脈絡のない入札結果であった。そうだとすれば、皮肉なことにも贈賄は成立しなかったことになる。今田の思考は完全に空白となっていた。

そんなことのために小川は一命を落とした。木内の顔が浮かんできた。謀殺されたのではないか、そんな疑念がわいてくる木内の死も司法解剖の結果「過労死」と結論された。いずれにしても木内も犠牲者の一人であることに間違いはない。なんと馬鹿げたことだ。長い商社勤めのなかでも、こんな間拔けたことは初めてである。今田は完全に打ちのめされた気分だった。今田は声を上げて笑った。狂ったような笑い方だった。そしてなぜか涙がこぼれてきた。

「いま、あなたには元子が必要なではありませんか……元子もあなたのことを待っているはずですよ」

そういつて今田の前に知子が自分のメモを置いた。二人は頷きあうようにして席をたった。今田はメモに目を通した。元子の住所が記してあった。元子はシドニーにいたようだった。会いたい。が、二人の間にはすでに結論は出ていた。今田はメモを細かく破り、灰皿のなかに捨てた。火をつけたメモが燃え尽きるのをじいっと見つめていた。

外は秋雨が降っている。今田はゆらぐように立ち上がった。降りしきる雨のなかを今田は背広の衿をたて、歩き始めていた。遠くで季節はずれの雷の音が聞こえてきた。濡れた今田の肩を稲妻が照らした。

(完)